

関係発達論としての自閉症研究

川 瀬 泰 治

一、はじめに

アメリカの精神科医カナーによって、謎にみちた一群の子どもが「小児自閉症」として報告されて以来、50年になる。50年というのはひとつの研究対象に対する研究期間として長いのかどうか分らないが、少なくともこの間に注がれた各分野からの関心や積み上げられた研究報告の数は相当なものといえよう。その結果「自閉症」の謎はここまで解明されたのかというと、その研究期間、研究の量に照してみてもあまりにも心許ない状況だといえよう。

村瀬^①は、自閉症という症状ぐらゐ多彩な解釈を生んできたものは他に例がないとして、「自閉症を事件だとすれば、この事件を引き起こした犯人を求めて、世界各国から名探偵が名乗りをあげ」、「ある時は母親や育て方が犯人にされた。ある時は、情緒が犯人にされたり、環境が犯人にされた。ある時は精神病が犯人にされ、脳障害が犯人にされた。今日では認知や言語や感覚が犯人にされ、二重ラセンや分子構造までが犯人の一味に加えられつつある。」として「要するにあらゆるものが犯人としてとりあげられてきた」という。また「自閉症とはなにか」という自閉症の概念自体についても様々な解釈がなされ論争が展開されてきたが、今なお決着がついていないとはいえない。つまり、研究対象そのものが依然として確定されていないということであり、

何を問題にしたらいいのかさえ定まっていけないということである。

このような自閉症の研究の変遷のなかで、60年代から70年代にかけて自閉症研究における「コペルニクス的転換^②」ともいうべき大きな変化が生じた。これはカナーが当初より描いていた精神分裂病の早期発現型との見方をくつがえして、ラターが脳器質障害から派生してくる認知機能障害が自閉症の中核障害であるとしたことが発端となった。小澤^③は、これを精神病から発達障害へという疾病論的大転換であり、精神医学上類をみないことだと皮肉を込めて指摘している。そして70年代以降今日に至るまで、心理学や精神医学における「科学主義」の風潮とマッチしてラターの言語・認知障害説が広く受け入れられ一応の通説となってきた。しかし、この説もここに来て大きく揺らぎ始めた観がある。

いづれにしても、目の前のひとりの自閉症児を理解しようとする際に実際に役にたつ自閉症理論があるのかと考えてみれば心寒い状況であるし、それどころか、多くの研究は自閉症を理解しようという方向自体を失っているのではないだろうか。また、自閉症理論はその当然の帰結として、独自の処遇論・治療法を導くべきであるが、小澤^③がいうように、隆盛をきわめているかに見える言語・認知障害説でさえ「今日まで具体的な治療法を提示できないでいる」という状況である。従って、自閉症児の処遇に関しては50年前に自閉症児を前に途方にくれていた状態から一歩も進み出していないといえる。

このような混沌の歴史にもかかわらず、自閉症に対しての興味は衰えるどころかますます増大していくかみえる。巷には自閉症関連の書物が次々に現れるし、児童精神医学や発達心理学では依然として中心的な研究テーマである。自閉症がこのように人々の心を惹きつけるのはなぜかと考えてみると、その風変わりな花草やことばなどに単純に好奇心をかきたてられるということもある。しかしより本質的な事として、彼らの示す奇妙さ、理解のしにくさは、われわれが普段自明のものとしてやりすごしている人間とはなにかという根源的な問いを新たに投げかけるものであり、自閉症問題の解明は人間存在を理解することに深く関わっているとの感触を持つからではないだろうか。このような素朴な直観が今日の科学的研究のなかでは具体的な研究に結びつかないところに問題があると思われる。浜田がいうように、自閉症は依然として謎であり、その謎の所在さえいまだ見定められていないといえる。今一度この素朴な直観に立ち戻って謎を見定めることが必要なのではないか。

二、言語・認知障害説の問題点

自閉症研究も20年程が経過して、成長後の自閉症者の様子が分かるようになってくると、それまでの心因性の精神病としての自閉症観が変わってきた。ラター⁵⁾は長年にわたって幼児期からの自閉症患者を追跡調査した結果、多くの自閉症児では成長後も言語発達の遅滞と認知能力パターンの異常が認められ、対人関係がかなり改善されてもそれらの障害は顕著であるとした。そして自閉症の基本障害を対人関係の障害とする従来の考えかたとはまったく逆に、言語および認知機能の障害が一次性障害であり、対人関係の障害はそこから派生してくる二次的なものであるとした。また、成長後の自閉症児には脳器質障害を示唆するてんかん発作などのみられるケースもあることから、言語・

認知障害のもとには器質的な脳障害が想定されたとした。この仮説に対しては、社会的関係の異常が言語開始以前からみられることをどう説明するのか、同じように言語理解の障害をもつ聴覚障害児の対人関係との差異についてどう説明するのか、また、儀式的・強迫的行動をいかに説明するのか、などの疑問が当初より投げかけられていた。⁶⁾しかし、それまでの思弁的な議論に対して科学的な研究方法や斬新な考え方は広く受け入れられ、研究の流れは大きく方向を変えた。

70年代以降の研究は、ラターの仮説を忠実になぞるようなかたちで展開していった。自閉症児の言語と認知の特異性は、主として心理学の分野における実験的研究へ、また脳機能障害に関しては医学の分野における生物学的な研究へと展開していった。

ラター自身もWISCを用いて測定した自閉症児の知能の特徴を言語・認知障害仮説の基礎においていたが、標準的知能テストをはじめさまざまな心理テストを用いて、自閉症児の聴覚認知、視覚認知、触覚認知などを片端から調べていくという研究が始まった。また、当初は認知機能に比べると運動機能は良好であると思われていたが、さまざまな課題が課せられて運動・感覚機能が調べられ、感覚の異常や身体図式の過程の問題などが報告された。これらの研究の結果は膨大なデータとして蓄積されていったが、それぞれは断片的であり、お互い矛盾するものも多い。また、人間の認知機能を情報処理過程と考え、情報入力段階の障害であるとか符号解読の障害であるなどの仮説を検証する研究もさかんになされた。これらの研究の結果は解釈も相互に食い違うことが多いし、「さまざまなテストの基礎にある知能観、言語観を吟味することなくそのまま自閉症児の測定に用いることの問題や、心理テストを課すこと自体の問題性」も指摘される。³⁾

しかしなによりも問題なのは、小澤がいうように、「言語・認知障害説が自らのよってたつ論理的基礎としてどうしても証明することが必要であったはずの、自閉症に特有な言語障害、認知障害の本質が、断

片的知見にうずもれて何等明確化されていない」ことであろう。小澤は、言語・認知障害説にたつ論文の殆どすべては、「言語・認知障害説が障児の世界認識と表現を明らかにするという方向に歩みだしたと評価しうるかどうかという点」を避けているとしている。また浜田は、それまでの情緒障害説に比べると認知・障害説は予するところがあるとしながらも「そこでいう認知メカニズムないし言語メカニズムというのが何であるのかという点」が問題であるとし、「これを自閉症児たちの具体的な症状とつなぐかたちで構想しているか」と、どうもその点が充分に落ちない」としている。つまり、これらの実験の結果明らかにされた自閉症児の言語的、認知的特徴をいくら寄せ集めてもそこから二次的に派生してくとされる自閉性というものはなんら明確にならないところが問題なのである。

生物学的研究は、遺伝学、生化学、大脳生理学など多岐にわたるが、言語や認知の研究と基本的には同じ問題を持つている。ここでも全体から切り離され細分化された部分を厳密な実験手続きにより明らかにしようという方向がみられるが、細分化された個々の特徴は自閉性という根本的な問題から乖離していく。そして結果はまちまちであり、また自閉症児に特有な生物学的な特徴を明確にしえたものはない場合がほとんどないと小澤は指摘している。

三、行動療法の問題点

自閉症の治療、処遇のありかたは、言語・認知障害説の台頭にともなつて、それまでの情緒の問題に焦点をあてた遊戯療法から行動療法へと転換した。行動療法の考え方の基本は条件づけを主体とした学習理論である。自閉症の行動療法の代表的存在はロバースであるが、彼はさまざまな強化スケジュールを用いて自閉症児の問題行動を修正したり、適応行動を学習させようとする。対象とする訓練目標は、言語

訓練や生活習慣の訓練、常同行動や自傷行為の消去から、「視線を合せた訓練」とか「感情の指導」「仲良し行動の指導」といったものにおよぶ。

他者と視線を合せることや抱き合うということが訓練によってできるようになったとして、果たしてそれが他者との本当の関係となつていくのか、また自閉性の解決になるのだろうかという疑問が起る。また、個々の行動は訓練によって習得されたり修正されたりするかもしれないが、それらを使って日常の場面で主体がどう生きていくかという視点が欠けたまま、やみくもに訓練が課せられるという状況を生み出している。

ロバースの行動療法理論の背景には自閉症は学習されたものだと前提があり、正しい学習をすることで治療可能だとの考えがあるようである。これは60年代の心因論と通じる自閉症観だといえよう。だから本来、器質的な障害を前提とする言語・認知障害説とは相容れないはずである。梅津はこれに対して、「神経病理学的基礎を認めているが、現在のところ医療技術では当分の間、決定的な治療法は望めない。行動療法は最終的な療法ではないが、神経病理学的障害をカバーしようような学習能力のバイパスを作ること」が目標だとしている。このようなプラグマティック考えをさらに徹底した自閉症の処遇を実践しているアメリカ・ノースカロライナ州のTEACCHプログラムは有名である。シヨブラーは、自閉症の基本的障害は克服することはできないが、訓練によって適応能力を伸すことはできるはずであり、さらに訓練によってカバーできない部分は環境を整備することで適応が可能となるとして、基本的には行動療法的な方法で日常生活のスキルを訓練する一方、自閉症児の抽象的・言語的能力の不足をカバーすべく「構造化された環境」を準備することという方法を提唱している。構造化された環境とは非言語的なコミュニケーション方法を主とした人的・物的環境の整備のことであるが、年少の自閉症児に対して

は特殊学校における独特な教育方法から、成人後はグループ・ホームや就業のための行政的な整備・ジョブ・コーチを含む職業環境の整備にわたってコミュニティ・ワーク的な体制として実現されており、これを全州規模で行うというものである。

いずれにしても、行動療法を主体とする治療・訓練法の基盤にあるのは適応主義的発想であり、発達とは適応行動が単純に加算されることだとする考え方があつた。梅津は「自閉症の本態に迫ることなどできないが、どのように行動形成したらよいかの方法論はかなり分かつていた」と言っているが、まさにこの表現のなかに行動療法の真髓が現われているといえよう。自閉症の本態を知ろうという姿勢が欠けたままで、自閉症というものを単に適応的行動の不足、個々の能力的な逸脱・欠損とみなし、いかなる経路にしようかと、しつこく訓練によつて少しでもそれらが解消すればよしとする発想である。

実際にこのような自閉症を理解しないままの自閉症の行動療法的治療は当然のことながら限界を持つている。かんしゃく、儀式的行動、常同的行動の消去や修正にはある程度効果が認められるが、学習された行動の般化はあまりみられず、また言語・認知障害説のもつとも肝要な部分と考えられる言語面の治療においては長期に渡る効果はほとんど認められないようである。ロバースやシヨプラーらは家族メンバーに家庭内で訓練者としての役割を果たしてもらうことでこのような行動療法の限界を補おうとしている。これは家庭内における親子の人間的な関係や自閉症における人との関わりの意味をあまりに皮相的にしか理解していないことの現れではないだろうか。

四、関係発達論の視点

以上、今日通説となつている言語・認知障害説と行動療法のもつ問題点を指摘したが、それらの問題は麻生が「医学的立場」と呼んだも

のから生じてくるであらう。麻生は「医学的な立場というのは、人間の心身における『異常(病気)』な状態を『正常(健康)』な状態と比較検討し、前者を後者に近づけようとする立場」だとして、「その目的のために医学は『異常』を説明しようとする」と述べている。したがつて言語・認知障害説はまず自閉症児を正常からの逸脱とみてその異常性に注目することになる。そこでは正常な子どもが言葉をしゃべつたりものをものとして認知することは自明のこととされ、なんら不思議なことではない。

逆に、そういったあたりまえのことができない自閉症児の症状が不思議なことと捉えられている。そして自閉症児の言語や認知・感覚を調べていく視点は主として正常との差の大きさや範囲を問題にすることになる。その結果、自閉症の説明についてはトートロジーに陥り、彼らがなぜ認知できないのか、なぜしゃべれないのかという問いに対して、それは彼らに認知障害や言語障害があるからだという問いで自閉症を理解したつもりになつてしまふ。自閉症の言語障害・認知障害ということが追及していけば、認知とはなにか言語とはなにかということが当然問題になつてくる筈である。そこに言及することなく自閉症の本質的な理解というのはいないであらう。

麻生は先の医学的立場に対して、発達心理学の視点は『正常(健康)』の状態それ自体を説明しようとしておる、人間が人間であるという謎を子どもたちがどのように成長していくのかを研究していくことによつて明らかにしようと思つておる、健康の子どもたちもそれに劣らず、それ以上に謎である。』といい、「自閉症の子どもたちは、健康の子どもたちがいかに不思議な存在か、身を持つて具体的に教えてくれる」としている。また、村瀬も「子どもの世界のもつ不思議さに比べたら、『自閉症の症状』の不思議さなどどれほど騒ぎたてることがあろうか」と言い、健康児の知覚・認知・言語が自明

どころかそれこそがまず解明されなければならないと主張する。さらに彼らが口をそろえて主張するのは、健全児がその発達の過程でどのように言葉を獲得していくか、世界に関する認識をどのように形成していくかということ、断片的な能力の発達として解明するのではなく、「こどもの世界」という全体性のなかで理解することが必要だということである。

村瀬が「〈分裂病〉や〈そう鬱病〉へてんかん」という現象は「正常な心理」からの逸脱としてみられるのではなく、心的現象の総体の構造が、はじめからかかえこんでいる可能性の現象として理解されなくてはならない」というように、こどもの全体的世界は自閉性というものの理解を必然として含んでいなければならないであろう。小澤も「自閉症児に特徴的とされる症状が実は発達過程上の現象であり、発達のある段階がのりこえ難いために、その発達段階では普遍的にみられる事象が長期間続いているというにすぎないのではないか」として、常に自閉性というものを視野に入れた発達論をめざすべきだとしている。

また浜田らは、重度心身障害児の生活世界の探求を通じて「障害を特殊化するのではなく、むしろ反対に障害の事実から人間の普遍性をみようとすべし」との必要性を説いている。同様に、自閉症論のめざすべき方向は、「子どもとはなにか」「発達とはなにか」「人とはなにか」という問題の解明につながるものでなければならない。すなわち発達論としての自閉症研究が必要なのである。

このところ発達研究における「個体能力論から関係発達論へ」というパラダイム転換が起こりつつある。鯨岡はこのパラダイム転換を次のような分かりやすい比喩で表現している。

「舞台の上には誕生したばかりの乳児とその子を養育する母親がい

る。舞台の背後には父親がおり、身近な人や見知らぬ人がいる。そしてその背景にはそれらの人をとりまく文化があり社会がある。けれども、いまスポットは乳児にだけ当てられて母親の存在も他の人々も社会もみな暗闇の中にある。」

これが個体能力発達論の状況である。そして、パラダイム転換については、

「舞台全体が明るくなれば、そこには親子がいろいろな思いをぶつけあい関わりあつて生きている生活世界が現出する。結局再び子どもに定位することになるとしても、まず問題は親子のその暮しのありようの中から立てられなければならない」として

この発達論におけるパラダイム転換は、浜田らによる「ワロン発掘」の作業によるところが大きい。ピアジェは人間の知的・認識的な側面に焦点を当て、それを個としての人間が獲得し認識の能力としていく過程としてこどもの発達をとらえた。それに対してワロンは、乳児における情動の働きの研究から、人間がもともと社会的存在であるとし、他者との関係の中からあらゆる心的発達が生じてくるとした。ワロンは子どもというもの、人間というものをつねにその全体としてとらえようとしている。そして、人や物に対する子どもとの関係論のなかで個体意識の発生としてこどもの精神発達をとらえようとした。

ピアジェ理論の単純明快な認識機能の切り取りに対して、人間をまるとしてとらえるという視点は難解であるが、ピアジェ理論の限界を乗り越えて真に子どもを理解し人間を理解しようとするればワロンの全体性・関係性の視点が重要だというわけである。そして、鯨岡が強調するように、まず発達研究は関係論としてはじめなければならないことである。また自閉症論は必然的に関係発達論として定位されることになる。このような観点から、関係の始源的形態に注

目し、関係の発生をあとづけようとする増山⁽¹⁸⁾、やまだ⁽¹⁹⁾、麻生⁽²⁰⁾らの研究がある。

五、自閉性の理解

小澤⁽³⁾は自閉症研究を批判的に総括した本の中で、控え目ながら自閉症研究のあるべき方向を明示していた。それは、あくまでも人と人の関係のなかで生じてくる「自閉」ということを自閉症の現象の核としてとらえ、関係論として研究をしなければならぬというものであった。浜田⁽⁴⁾による自我形成の視点からの自閉症論はこの方向にそったものとなっており、また、その方法は関係発達論的研究の具体的手続きを示すものとなっていると思われるので、ここでやや詳しく取り上げてみたい。

浜田は、カナ⁽¹⁾が最初に小児自閉症を分裂病の最早期発現とみなしたことの意味を重視し、自閉症児と対した時にわれわれが感じる「自閉」という現象に立ち返って考えようとしている。彼は、まず「自閉」とは何かという問いに対して、人間関係をとること自体が困難であることの問題としてとらえる。そして周囲の他者と関係を結ぶべき「自我」そのものの障害であるとして、自我の問題を自閉症研究の核心にすえる。分裂病の「自閉」はそれまで他者関係を支えてきた自我の崩壊の一樣相であり、自閉症の「自閉」は発達初期に形成されるべき自我の形成異常の一樣相だという。

そして自我とはなにか、自我形成はどのように進むのかという人間の心的現象の核心的問題のなかで自閉症の現象が考えられていく。彼はワロンにならって、人間の心的現象はすべて身体に基盤を持っており、他者との関係は身体を介して始まると考えている。最初の関係性は身体どうしの同型性と相補性を基盤にして動いていき、相手と同じ身体のかたちをとること（同型）で相手の行動の意味をとらえ、それ

を相互にやりとりする（相補）なかで他者との共通の意味世界を確保していく。そして、そのような他者とのやりとりが同時に自分の内の回路を生み出して、他者とは離れたものとしての自我が生まれてくるとしている。彼は「このように他者との関係のなかから醸成されてくる自我二重性の心的構造そのものの成立を自我形成と考える」とし、「自我と他者とは本来切り離せないものとして相互に絡み合い、やりとりしつつ（自我の二重性）、それが自我のなかで内なる他者（第二の自我）とやりとりする回路と重なる（自我二重性）というふう考える」という。そして、自閉症の核は自我形成の問題であり、そのもととなる相互身体性ないし相互主体性の問題であるとしている。

相互主体性の問題とは、三項関係の問題である。三項関係とは人と人があるもの（あるいはこと）を共有する関係ということであり、子どもが人間の意味世界を作りあげ世界を認識していくための基盤となるものである。メルロー・ポンティ⁽²⁾が「私がへ物に向けられた意識」であるとすれば、私はその物のところで、まさに他人のものである行為に出会い、その行為にある意味を見いだすことができるはずである。なぜなら、他人の行為は、私自身の身体にとっても活動の主題となる可能性を持っているから。」と述べているが、これはそのままここでいう三項関係にあてはめて考えることができる。つまり、母と子は互いにひとつのものを、相手がそのものにどのような行為をなすのかを見てそのものの意味を知る。さらに浜田のいうように、自分をそこに同型的に重ね合わせることで相手の気分や経験を共有する。そして相手があるものを指し示して笑い、それを受け止めて笑いかえすというように、気分や経験を相補的に交換しあう。自閉症はこの三項関係がなりたちにくい子どもであり、他者と同型―相補の関係を結ぶこと、〈能動―受動〉のやりとり関係が難しい子どもだと考えられる。そして浜田は「三項関係―意味世界―言語発生―自我形成」という発達のな連関をたどり、自閉症では自我の二重性の形成そのものに発達障害

が及んでいるとしている。

浜田はどのように自閉症の核となる障害を見定めたいか、自閉症の主症状をひとつのまとまりをもつ心的機制として理解する道筋を提示している。まず「多動」について彼は次のように述べる。注意散漫で動き回るという場合、注意能力の問題ではなく、ものの意味の問題である。三項関係がなりたちにくい自閉症児の場合、周囲の世界が注意を向けるべく意味づけられていないことから生じてくる。また多動の問題とは、動きそのものが多いということではなく、動きの意味が見えにくいことである。「常同行動・特定のものへの固執」については、他者とのあいだで共有することはできないけれども、自閉症児なりのものの意味づけの働きだとされる。ただし、ものの意味は対物認知の枠にとどまるものであり、他者とからみあう三項関係とはならぬ。他者が常同行動に介入するのをいやがるのはこのためである。「同一性保持」は、他者の関与があることが普通であり、こだわりの面をもちつつも一定の適応行動だとされている。決まったやりかたに訴えることで「安心」を得ながら世の中へ対応して行こうとすることだという。この3つの自閉的特徴は、ほとんどの自閉症児が成長の過程でたどる道筋ともなっている。

以上のように、関係論としてとらえると自閉症の世界が私たちの了解の範囲に入ってくる。我々が自閉症児に対したときに感じる「自閉性」すなわちコミュニケーションの出来なさ、分からなさを問題にする時に、逆に我々がなぜお互いに分かり合えるのか、コミュニケーションができるのかを問う視点³がそこにある。つまり、我々が自明としている対人理解を白紙にまで還元することではじめて自閉症の対人世界を了解の範囲に取り込むことができるようになる。

この「白紙への還元」について浜田は、自閉症児に対した時の奇妙さについて、「この奇妙さ、理解のしにくさを私たちはどう考えればよいのでしょうか。これはもつぱら彼らの側の奇妙さの問題ではなく、

それを「奇妙」と思う私たちの対人理解の枠組みの問題でもあるはずです」といつている。小澤はまた、「自閉は障児の属性としてではなく、治療者と障児の関係の問題として、あるいは「へみるもの」の心の現象としてとらえられなければならない」という問題提起もした。この問題は、世界は私の主観のありかたそのものと「相関しあっている」という現象学的モチーフのもとに、自閉症の現象を受け止めなければならぬということである。

中田²²は重症心身障害児の教育に対する現象学的方法を模索する中で、次のようにいう。心理学は量子論以前の自然科学が規定した「客観的」世界観（それ自体が今日ではあやうくなっている）を無前提に受け入れて研究をすすめることはできない。われわれが素朴に信じている「客観的」世界（重症児という存在）の成立過程そのものについて問題にするべきである。そして、重症児の教育方法を研究するにあたり、単に重症児の経験構造を研究するだけでなく、重症児の経験構造を研究する我々研究者自身や重症児に対する教師の経験構造をも研究しなければならぬとしている。そして、重症児に対する教師や研究者自身の経験構造の解明がいかに教育効果をもたらすかについて、自らの教育実践を通して訴えている。そこには、重症児に対する真の理解がおのずと治療・教育の効果をもつということが見てとれる。

六、おわりに

本稿は、小澤が10年前に投げかけた重要な問題提起を受けて、その後の自閉症研究がどう進んできたのかを検討した。自閉症はまだ未知のものであるが、近年、その未知を解明するにあたって本質的とも思える方向が提示されている。それは関係発達論的視点である。自閉症児は、おそらくなんらかの生理学的障害を持ちながらも、他者や環境との関係のなかで生活世界を築いていくのであろう。自閉症研究はそ

ういった姿によりそいながら自閉症児のところがどのようにゆれ動いているのかをみつめ、その過程の中から、小澤がいうように、真の「自閉症の精神病理学」をうちたてていくことが求められている。

引用文献

- 1 村瀬学 一九八三 理解のおくれの本質 大和書房
- 2 中根晃 一九七八 自閉症研究 金剛出版
- 3 小澤勲 一九八四 自閉症とはなにか 精神医療委員会
- 4 浜田寿美男 一九九二 〈私〉というものなりたち ミネルヴァ書房
- 5 Rutter M. 鹿子木敏範(監訳) 一九七八 小児自閉症 文光堂
- 6 山崎晃資 一九八七 自閉症研究の歴史 山崎晃資、栗田広(編)「自閉症の研究と展望」 東京大学出版会
- 7 Lovaa S.O.I. 佐藤真由美(訳) 一九八二 治療者としての親 丸井文男(監訳)「自閉症：その概念と治療に関する再検討」 黎明書房
- 8 梅津耕作 一九八〇 自閉児の行動評定 金子書房
- 9 Schopler E. et al. 佐々木正美、他(訳) 一九八五 自閉症の治療教育プログラム ぶどう社
- 10 Howlin P. et al. 石坂好樹、他(訳) 一九九〇 自閉症の治療 ルガール社
- 11 Shopler E. et al. 田川元康(監訳) 一九八七 自閉症児と家族 黎明書房
- 12 麻生武 一九九三 自閉症の子どもたちと発達心理学 無藤隆(編) 別冊発達15現代発達心理学入門 ミネルヴァ書房
- 13 村瀬学 一九八一 初期心的現象の世界 大和書房
- 14 浜田寿美男、山口俊郎 一九八四 子どもの生活世界のはじまり ミネルヴァ書房
- 15 Wallon H. 浜田寿美男(訳編) 一九八三 身体・自我・社会 ミネルヴァ書房
- 16 鯨岡俊 一九九三 発達研究の現在：関係発達論への転回 橋口他(編)

「児童心理学の進歩」Vol.32

- 17 増山真緒子 一九九一 表情する世界：共同主観性の心理学 新曜社
- 18 増山真緒子 一九八六 共同主観性の発生論的機序 廣松渉、増山真緒子「共同主観性の現象学」第2部 世界書院
- 19 やまだようこ 一九八七 ことばの前のことば 新曜社
- 20 麻生武 一九九二 身振りからことばへ：赤ちゃんにみる私たちの起源 新曜社
- 21 Merleau-Ponty M. 滝浦静雄(訳) 一九六六 幼児の対人関係「目と精神」 みすず書房
- 22 中田基昭 一九八四 重症心身障害児の教育方法 東京大学出版会